

三つのなぜ

芥川龍之介



ファウストは神に仕えていた。従って林檎りんごはこういふ彼にはいつも「智慧ちえの果」それ自身だった。彼は林檎を見る度に地上樂園を思い出したり、アダムやイヴを思い出したりしていた。

しかし或雪上りの午後、ファウストは林檎を見ているうちに一枚の油画を思い出した。それはどこかの大伽藍だいがらんにあった、色彩の水々しい油画だった。従って林檎はこの時以来、彼には昔の「智慧の果」の外にも近代の「静物」に変わり出した。ファウストは敬虔けいけんの念のためか、一度も林檎を食ったことはなかった。が或嵐はげの烈しい夜、ふと腹の減ったのを感じ、一つの林檎を焼いて食うことにした。林檎は又この時以来、彼には食物くいものにも変わり出した。従って彼は林檎を見る度に、モオ

ぜの十戒を思い出したり、油の絵具の調合を考えたり、胃袋の鳴るのを感じたりしていた。

最後に或薄ら寒い朝、ファウストは林檎を見ているうちに突然林檎も商人には商品であることを発見した。現に又それは十二売れば、銀一枚になるのに違いなかった。林檎はもちろんこの時以来、彼には金銭にも変り出した。

或どんより曇った午後、ファウストはひとり薄暗い書齋に林檎のことを考えていた。林檎とは一体何であるか？——それは彼には昔のように手軽には解けない問題だった。彼は机に向つたまま、いつかこの謎なぞを口にしていた。

「林檎とは一体何であるか？」

すると、か細い黒犬が一匹、どこからか書齋へはいつて来た。のみならずその犬は身震いをするたちまと、忽ち一人の騎士に

変り、丁寧にファウストにお時宜しぎをした。――

なぜファウストは悪魔に出会ったか？――それは前に書いた通りである。しかし悪魔に出会ったことはファウストの悲劇の五幕目ではない。或寒さの厳しい夕、ファウストは騎士になった悪魔と一しよに林檎の問題を論じながら、人通りの多い街を歩いて行った。すると痩やせ細った子供が一人、顔中涙に濡ぬらしたまま貧しい母親の手をひっぱっていた。

「あの林檎を買っておくれよう！」

悪魔はちよつと足を休め、ファウストにこの子供を指し示した。

「あの林檎を御覧なさい。あれは拷問ごうもんの道具ですよ。」

ファウストの悲劇はこういう言葉にやつと五幕目の幕を挙げはじめたのである。

ソロモンは生涯にたった一度シバの女王に会っただけだった。それは何もシバの女王が遠い国にいたためではなかった。タルシシの船や、ヒラムの船は三年に一度金銀や象牙や猿や孔雀くじやくを運んで来た。が、ソロモンの使者の駱駝らくだはエルサレムを囲んだ丘陵や沙漠さばくを一度もシバの国へ向ったことはなかった。

ソロモンはきょうも宮殿の奥にたった一人坐すわっていた。ソロモンの心は寂しかった。モアブ人、アンモ二人、エドミ人、シドン人、ヘテ人等とつの妃きたちも彼の心を慰めなかった。彼は生涯に一度会ったシバの女王のことを考えていた。

シバの女王は美人ではなかった。のみならず彼よりも年を

とつていた。しかし珍しい才女だった。ソロモンはかの女と問答をするたびに彼の心の飛躍するのを感じた。それはどういふ魔術師と星占いの秘密を論じ合う時でも感じたことのない喜びだった。彼は二度でも三度でも、——或は一生の間でもあの威厳のあるシバの女王と話していたのに違ひなかつた。

けれどもソロモンは同時に又シバの女王を恐れていた。それはかの女に会っている間は彼の智慧ちえを失うからだった。少くとも彼の誇つていたものは彼の智慧かかの女の智慧か見分けのつかなくなるためだった。ソロモンはモアブ人、アンモ二人、エドミ人、シドン人、ヘテ人等の妃たちを蓄えていた。が、彼女等は何といつても彼の精神的奴隷だった。ソロモンは彼女等を愛撫あいぶする時でも、ひそかに彼女等を軽蔑けいべつしていた。

しかしシバの女王だけは時には反つて彼自身を彼女の奴隷にしかねなかつた。

ソロモンは彼女の奴隷になることを恐れていたのに違ひなかつた。しかし又一面には喜んでいたのにも違ひなかつた。この矛盾はいつもソロモンには名状の出来ぬ苦痛だつた。彼は純金の獅子ししを立てた、大きい象牙の玉座の上に度々太い息を洩もらした。その息は又何かの拍子に一篇の抒情詩に変わることもあつた。

わが愛する者の男の子等の中にあるは
林の樹の中に林檎りんごのあるがごとし。

.....

その我上に翻したる旗は愛なりき。

請ふ、なんぢら乾葡萄ほしぶどうをもてわが力を補へ。

林檎をもて我に力をつけよ。

我は愛によりて疾はやみわづらふ。

或日の暮、ソロモンは宮殿の露台にのぼり、はるかに西の方を眺めやった。シバの女王の住んでいる国はもちろん見えないのに違いなかった。それは何かソロモンに安心に近い心もちを与えた。しかし又同時にその心もちは悲しみに近いものも与えたのだった。

すると突然幻は誰たれも見たことのない獣を一匹、入り日の光の中に現じ出した。獣は獅子に似て翼をひろひ、頭を二つ具そなえていた。しかもその頭の一つはシバの女王の頭であり、もう一つは彼自身の頭だった。頭は二つとも噛かみ合いながら、不思議にも涙を流していた。幻は暫ひまく漂ひらっていた後、大風の吹き渡る音と一しよたちまに忽たちまち又空中へ消えてしまった。そのあと

には唯ただかがやかしい、銀の鎖に似た雲が一行、斜めにたなび
いているだけだった。

ソロモンは幻の消えた後もじつと露台に佇たたずんでいた。幻の
意味は明かだった。たといそれはソロモン以外の誰にもわか
らないものだったにもせよ。

エルサレムの夜も更けた後、まだ年の若いソロモンは大勢の
妃たちや家来たちと一しよに葡萄の酒を飲み交していた。彼
の用いる杯や皿はいずれも純金を用いたものだった。しかし
ソロモンはふだんのように笑ったり話したりする気はなかつ
た。唯きようまで知らなかった、妙に息苦しい感慨みなぎの漲みなぎつて
来るのを感じただけだった。

番紅花サフランの紅くれなゐなるを咎とがむる勿なかれ。

桂枝けいしの匂におへるを咎とがむる勿なかれ。

されど我は悲しいかな。

番紅花は余りに紅なり。

桂枝は余りに匂ひ高し。

ソロモンはこう歌いながら、大きいたてこと豎琴を掻き鳴ならした。のみならず絶えず涙を流した。彼の歌は彼に似げない激越の調べを漲らせていた。妃たちや家来たちはいずれも顔を見合せたりした。が、誰もソロモンにこの歌の意味を尋ねるものはなかった。ソロモンはやつと歌い終ると、王冠を頂いた頭を垂れ、暫しばらくはじつと目を閉じていた。それから、——それから急に笑顔を挙げ、妃たちや家来たちとふだんのように話し出した。

タルシシの船やヒラムの船は三年に一度金銀や象牙や猿や孔雀を運んで来た。が、ソロモンの使者の駱駝はエルサレム

を囲んだ丘陵や沙漠を一度もシバの国へ向ったことはなかった。

なぜロビンソンは猿を飼ったか？ それは彼の目のあたり
に彼のカリカチュアを見たかったからである。わたしはよく
承知している。銃を抱いたロビンソンはぼろぼろのズボンの
膝をかかえながら、いつも猿を眺めてはもの凄い微笑を浮か
べていた。鉛色の顔をしかめたまま、憂鬱に空を見上げた猿
を。

三つのなぜ

底本：「昭和文学全集 第1 巻」小学館

1987（昭和 62）年 5 月 1 日初版第 1 刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第八巻」岩波書店

1978（昭和 53）年 3 月 22 日発行

初出：「サンデー毎日 第六年第十五号」

1927（昭和 2）年 4 月 1 日発行

入力：j.utiyama

校正：多羅尾伴内

2004 年 1 月 5 日公開

2016 年 2 月 25 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。